〈青森県史〉の窓 203

三戸南部氏の津軽侵攻と〝流通革命〟

布施 和洋
（南部町教育委員会社会教育課史跡対策室総括主査）

現代日本では、東京や名古屋、大阪などの大都市圏や工業地帯は太平洋側に集中する。それらが新幹線や複数の高速道路・海路などの交通インフラで結ばれ、太平洋ベルト地帯を形成し、圧倒的に日本海側よりも太平洋側が繁栄している。しかし、今から約500年前の室町・戦国時代は表裏逆だった。

当時は舗装道路やトラックがないため、商品は海路で運搬されたが、太平洋を北上する商船ルートはまだ開拓されていなかったため、日本海ルートが物流の大動脈だった。

大陸最大の貿易港寧波から、当時の日本の玄関口である九州博多（福岡県）へ物資が運ばれ、さらに瀬戸内海や若狭（福井県）、輪島（石川県）など各港を経由して、多くの舶来品が北日本にももたらされた。安藤（安東）氏が支配していた十三湊（青森県五所川原市）は、この日本海ルート最北の拠点貿易港だった。

この交易利権を獲得するためか、15世紀前半に南部氏は2度にわたる津軽侵攻で「日之本将軍」安藤氏を滅ぼし、津軽地方を手中に収めるに至る。津軽侵攻後、南部氏は日本海交易によりもたらされる商品や利益を獲得するようになり、この痕跡が三戸南部氏の本拠地だった聖寿寺館跡（青森県南部町）の発掘調査で確認されている。

聖寿寺館跡で出土した瀬戸美濃製品の数量を年代ごとに集計すると、津軽制圧後の15世紀末～16世紀前半になると直前の時期の約40倍に流入量が増加し、三戸南部氏の中で〝流通革命〟とも呼べるような大きな変化のあったことが読み取れる。

一方、なぜか東に約20キロメートルしか離れていない同じ南部氏一族の八戸南部氏の本拠地根城では、数量にほとんど変化が認められない。

このことから、日本海交易の利益は南部氏一族の中で三戸南部氏だけが独占していたものと考えられる。また、津軽侵攻の主体者は南部氏一族の中でも三戸南部氏が担っていたとも想定できる。

ちなみに陶磁器の種別では、大陸との交易が活発に行われていた瀬戸内海の城館群では、高級品の大陸産2％、国産品98％と圧倒的に国産が占めるが、大陸から最も遠い位置にある聖寿寺館では大陸産70％、国産30％と、大陸産陶磁器が圧倒的に多いのが特徴的である。

当時、唐物としてもてはやされた大陸からの舶来品が、南部の武将たちに好まれていたことがうかがえる。国内の出土が数例の飛青磁、瑠璃釉磁器、青磁不遊環付瓶、青磁盤、青磁花生、青磁器台、青白磁梅瓶、染付魚藻文盤・龍濤文壺、茶壺など、国内屈指の高級陶磁器が多いのも特徴である。

高級陶磁器の出土傾向は、福井県の戦国大名朝倉氏の本拠地である一乗谷遺跡と同レベルで、屋敷の座敷飾りに用いられたと考えられる。

聖寿寺館は、はるかかなた、大陸から始まる日本海交易の終着駅でもあり、この恩恵は戦国時代に突入した三戸南部氏発展の原動力となった。

聖寿寺館跡出土陶磁器＝小川忠博さん撮影・南部町教育委員会提供

『東京と青森』652号
東京青森人会、2022年8月